広島大学考古学研究室紀要第１号、2009 年、97～120頁。

斜縁神獣鏡の変遷と系譜

実 盛 良 彦

１．はじめに

「鏡はその時代をうつす」とは、鏡に関する話においてよく言われることである。

これまで、青銅鏡に関しては多くの研究が行われ、様々な点が明らかにされてきた。この分野は現在かなり研究が深化している分野の一つであると言える。しかしながら、中には、まだあまり研究の進んでいない鏡種があるのも事実である。しかもこういったものはしばしば、その時代について研究していく上で重要な遺物である場合も少なくない。例えば、一般に斜縁神獣鏡と呼ばれている鏡も、その中の一つである。これは、日本の古墳からその多くが出土する鏡で、中国大陸で作られたと多くの人がみているものである。しかし、それ以上になると、研究者によって意見が異なる事柄も多い。この斜縁神獣鏡に関して研究することは、当時の世界を明らかにしていく上で重要である。

これから、斜縁神獣鏡にその「時代をうつす」ために、考察を行なっていきたい。

２．研究史と問題の所在

これから斜縁神獣鏡の研究を進めていくために、まずその研究史を見ておきたい。

これまでに斜縁神獣鏡を中心に扱った論文はあまりない。その理由は、斜縁神獣鏡が鏡式として設定されたのが遅かったこと、鏡の面数が少なかったことによるものと思う。しかしながら、論文の中で斜縁神獣鏡に言及しているものは多くある。

斜縁神獣鏡は、その研究の最初期においては、三角縁神獣鏡との区別がつけられていなかった。早くも 1897 年に三宅米吉は、鏡縁の上面が「稍内方ニ傾ケルモノ」があることを指摘していた（三宅 1897）。しかしながら、富岡謙蔵が、斜縁神獣鏡の類と三角縁神獣鏡の類を一括して、神獣鏡の中で外区が「二条の鋸歯文帯と、其の中間に一条の複線波文帯より成れるもの」として分類した（富岡 1920）ように、その差は十分に認識されていなかった。

後藤守一は、三角縁神獣鏡の項と画像鏡[1] の一部の神人龍虎鏡の項の両方で斜縁神獣鏡に言及した（後藤 1926）。後藤は三角縁神獣鏡の項で「更に趣を異にしてゐるが、その表現の意義の相似たものと思はれる一型式群」として斜縁神獣鏡をあげ、「神像の表現が著しく趣を異にして」おり、「二神相並んではゐるが、一が主神らしく表はされ」、「龍虎の表現等にも異なるものがある」ものの、神人龍虎鏡とは「相似ないものがある」とした。また一方で神人龍虎鏡の項ではこれを「表現の手法に於いて三角縁式神獣鏡の特徴を示」すとし、それぞれの項でこの鏡を「神人龍虎鏡式二神二獣鏡」、「三角縁神獣鏡式神人龍虎鏡」と呼んだ。このように後藤の鏡式設定には少々混乱が見られたが、一方で「 此の種の鏡は、外区が或は平面、或は浅い匙面を作って三角縁に終るかの断面を示 」すとして断面形状に注意を向けたほか、「 銘文は多く、「 吾作明竟、幽湅三商、衆徳玄道、配像萬彊、曾年益孫子 」といふに

類したものが多い」として、銘文にも分類視点が向けられることを示すなど、見るべきところの多いものであった。分類に関しても視点を変えれば、後藤は斜縁神獣鏡を三角縁神獣鏡と神人龍虎画像鏡の両方に関連がある鏡であると考えていた、とみることができよう。

斜縁神獣鏡と三角縁神獣鏡を、初めて異なる鏡式として分離したのは梅原末治である。梅原は佐味田宝塚古墳の出土鏡の解説の中で、斜縁神獣鏡に関して「その縁の如きも三角縁より稍々平縁に近き手法を示せり」、「その縁は三角縁に少しく平縁を加味せるが如き断面を呈」すと述べ、これを三角縁神獣鏡とは区別した（梅原 1921）。次いでヘボソ塚古墳の報告において、三角縁神獣鏡と区別したその鏡式を、「平縁式」神獣鏡と呼んだ[(2)]（梅原 1922）。少し年代が下るが、1962 年に発表した鏡に関する概説的な論文の中で、梅原は「平縁式神獣鏡」の項を設け、これを鏡式として設定した（梅原 1962）。その中でこの鏡式について、「鏡体の断面が前者（盤龍鏡－筆者注）と同一で、その背紋が肉刻の神獣を配した」ものであるとした。さらに、「段々と三角縁になったものである」として、その変遷に関しても触れた。しかしながらこの論文の性格上、それ以上の詳細な研究はなく、記述は概説的なものにとどまっていた。

斜縁神獣鏡という鏡式を確立したのは樋口隆康である（樋口 1979）。樋口は後漢鏡の一鏡式として斜縁二神二獣鏡をあげ、「内区の主文は四乳の間に二神二獣を配したもので二神はそれぞれ侍仙をともなっている。銘帯があって外区は複波鋸歯文帯からなっている」と定義した。この樋口による鏡式設定により、その後の詳細な研究が可能になったと言える。

このようにして斜縁神獣鏡という鏡式が認識されるに至ったが、その年代は後漢鏡という漠然とした範疇でしか捉えられていなかった[(3)]。これに検討を加えたのが岡村秀典である。岡村は斜縁神獣鏡を、彼の言う漢鏡７期（岡村 1993b）の第３段階の鏡であり、３世紀前半代の製作であるとした（岡村 1989、1990、1999）。彼は、斜縁神獣鏡には「上方作系浮彫式獣帯鏡や画像鏡と共通する文様があること、斜縁神獣鏡の銘文「師命長」の「師」は晋室の祖司馬師の諱で、晋代にはその字を避けていたこと、楽浪の貞梧洞八（ママ）号木槨墓では漢鏡６期の内行花文鏡とともに出土していることから、三角縁神獣鏡に先行する三世紀前半の年代が想定できる」とした[(4)]（岡村 1999）。後に岡村は、安満宮山古墳での共伴関係を重視してその年代観を若干訂正し、３世紀前半代の中でも漢鏡７期からは時期を下げて魏鏡に含まれるとした（岡村 2001、2005）。

系譜の問題に関しても岡村は発言していて、斜縁神獣鏡を、画像鏡を母体に神獣鏡の図像表現を取り入れたものとした。また共通する紋様を持つ「上方作」系浮彫式獣帯鏡や画像鏡は徐州系統であるため、斜縁神獣鏡も同様に徐州系統の鏡と推定した（岡村 1999）。

三角縁神獣鏡に関して総合的な研究を行った福永伸哉は、斜縁神獣鏡には外周突線が９割にあり、三角縁神獣鏡と関連があるとした。但し斜縁神獣鏡の鈕孔は円形系統であり、長方形鈕孔をもつ三角縁神獣鏡とはその点では関連が薄いようである（福永 1991、2005）。

西川寿勝は斜縁二神二獣鏡を、神人龍虎画像鏡を「典型種鏡」とした場合の「亜種鏡」であるとした。その理由として西川は「怪獣の細部表現や脇侍の衣装に意味不明な改変や形骸

化がある」ことを挙げた。さらに、斜縁神獣鏡は「定型化とよべるくらい強い規則を持って楽浪郡を中心に分布し」、「発見は楽浪郡地域とわが国だけで」あるとして、画紋帯同向式神獣鏡、飛禽鏡、上方作系獣帯鏡とともに、西川が楽浪郡地域で創出されその地を中心に流通したとした「楽浪鏡」に含めた。また、変遷に関しては、「三角縁神獣鏡と同じ方向で斜縁化が明瞭になる」鏡であるとした（西川 1994、1999、2000）。

上野祥史は、斜縁神獣鏡の銘文などから、斜縁神獣鏡は彼の分類の「環状乳神獣鏡ⅡＣあるいは劉氏系画象鏡を含む華北東部系の作鏡系譜と」関連するとした（上野 2006）。

こうした流れを受けて森下章司は、斜縁神獣鏡を彼の言う「華北－東部系鏡群」に含めた（森下 2007a、2007b）。「華北－東部系鏡群」にはＡ系として飛禽鏡、「上方作」系獣帯鏡、「袁氏作」系画像鏡・獣帯鏡が、Ｂ系として神人歌舞画像鏡が、Ｃ系として「画文帯」同向式神獣鏡（Ⅰ式）、環状乳神獣鏡（ⅡＣ式）、斜縁神獣鏡・四獣鏡が含まれる。Ｃ系の特徴は、「とくに精緻な浮彫表現」であるという（森下 2007b）。

以上をまとめれば、斜縁神獣鏡の系譜に関して現在考えられているのは、「画像鏡をもとに神獣鏡の要素を加味して作り出されたものであり、のちに要素の一部が三角縁神獣鏡に取り入れられた。製作地は華北東部から楽浪郡にかけての地域が推定される」ということが言えるだろう。

斜縁神獣鏡の新旧関係について、森田克行は、大阪府安満宮山古墳鏡・大阪府和泉黄金塚古墳鏡・島根県造山３号墳鏡を比較し、銘文の省略と図像表現の簡略化という視点から、黄金塚鏡→安満宮山鏡→造山３号鏡という前後関係を想定した（森田 1998）。斜縁神獣鏡の新旧関係に関して詳細な観察をもとに述べたのはこの論文が初めてである。

古瀬清秀は、斜縁神獣鏡には二つのタイプがあることを指摘した（古瀬 1999）。一つが「鋳上がりの良好な長文の銘字を有するタイプ」で、もう一つは「鏡背文様の曖昧模糊とした」タイプである。この違いは副葬古墳の時期差として言えるとし、前者は前期前半、後者は前期後半が中心であるとした。鏡背紋様の不鮮明なものについては、「踏み返しあるいは模倣の技法によるものと判断できないであろうか」と提言を行った。このように古瀬は、銘文の長短により斜縁神獣鏡の新古が分けられ得る可能性を示した。

分布論に関しては、川西宏幸や辻田淳一郎、それに下垣仁志の発言がある（川西 1989、辻田 2001、下垣 2004）。これらの研究によれば、川西が斜縁神獣鏡の分布は「近畿地方に多い」として「画文帯」神獣鏡・三角縁神獣鏡・盤龍鏡と同じ「近畿型鏡種」に位置づけたように、斜縁神獣鏡の分布の中心は近畿地方であり、三角縁神獣鏡と似た分布傾向を示すようである。

このほか今井堯は、面径や出土古墳の保有形態の視点から斜縁神獣鏡のランクを明らかにしようとした（今井 1993）。

ところで、これまで述べてきたように斜縁神獣鏡に言及している論文自体は多いが、斜縁神獣鏡のみを詳細に論じたものはほとんどないことに気づく。斜縁神獣鏡について主体的に研究した唯一の論文は村松洋介のものである（村松 2004）。村松は斜縁神獣鏡から複数の要素を抽出した。村松が重視したものにまず外区の「複波文」の形状がある。村松はこれを「波

文の開きが大きく角度が明らかに鈍角な」A類と「波文の開きが小さく角度がやや鋭角な」B類に分けた。そして、「A類は鈍角に施されており、その上ピッチも均一である。これは施文前に複波文のピッチの頂点にあらかじめ割付を行なっていた可能性が考えられる。ランダムに施文することが出来るB類よりも高い技術を要する文様と言えよう」として、A類はB類に先行するとした。

それとともに、内区主紋様の表現方法に着目し、その特徴からこれを表現①～⑤に分けた。そして、他の属性も含めその組み合わせから斜縁神獣鏡を七つの鏡群に分けた。その際、「図像表現の差異が他の属性を包括しながら大きな分類として通用する」とし、図像表現の分類を援用して斜縁二神二獣鏡を①群・②群・③群・④群・⑤群に、斜縁二神四獣鏡を③群・④群に分けた。

さらに、これらの結果を踏まえて斜縁神獣鏡を第Ⅰ段階から第Ⅲ段階までの三段階に編年した。第Ⅰ段階は、斜縁二神二獣鏡の内、①群と②群が認められ、両者とも「複波文A類」を持つ。第Ⅱ段階は、「斜縁二神二獣鏡の内、③群・④群・⑤群が登場する。複波文B類は、これらの鏡群と連動した属性である」。第Ⅲ段階は、「斜縁二神二獣鏡の内、③群が継続するが、ここでは前段階で正面を向いていた青龍に相当する獣像が横を向き、何を表現したものかすら判別できなくなっている。これが第2段階と第3段階を区分する大きな指標である」とした。斜縁二神四獣鏡については、「鏡背を6分割する斜縁二神四獣鏡の方が、技術的にも思想的にも後出するものと予想される」とし、「斜縁二神二獣鏡の第Ⅱ段階よりも後出する属性と、第Ⅲ段階に先行する属性とを内包しているため、全体的には第Ⅱ段階から第Ⅲ段階にかけての製作を想定しておきたい」とした。

以上、研究の展開をみてきたが、斜縁神獣鏡に関しては部分的にしか触れられないことが多いながらも、これまでに明らかになってきたことは多い。しかしながらその編年作業に関しては、縁部の断面形態をもとにした変遷観（梅原 1962、西川 2000）と、内外区の紋様表現をもとにした変遷観（森田 1998、村松 2004）とがあり、それぞれ独自に論を展開している状況にある。それぞれの変遷観は整合しておらず、早急な編年の確立が望まれる。そうした中にあって、北朝鮮の貞梧洞 12 号墓出土鏡は、「青盖作竟」に始まる銘文を持つが、森下章司は、この銘文からこの鏡が斜縁神獣鏡製作の早い段階における製品であったと理解する（森下 2007a）。これに加えてもう1面、「青盖作竟」に始まる銘文をもつ斜縁神獣鏡がある。韓国崇実大学校（旧崇田大学校）蔵の伝楽浪出土斜縁二神四獣鏡である。この鏡の銘文は「青盖作竟自有紀　上有東王公西王母　青龍在左白虎居右　仙人子喬赤松子　長保二親宜孫子　大吉昌」とあり[5]、斜縁神獣鏡では他に類を見ない上に、この鏡の図像表現は浮彫式獣帯鏡に似るところがあり、異質である。これらの鏡は斜縁神獣鏡製作初期のものであると理解したい。だが、これまでの研究では、これらの鏡はほとんど顧みられておらず、詳細な位置づけは不明である。

さらに、村松が斜縁神獣鏡をⅠ～Ⅲ段階に分ける根拠とした複線波紋の形状の違いは、後述するがむしろ、製作者集団の違いに起因する可能性が高い。また龍虎の区別が判然としな

正面向き　　斜め向き　　横向き

第１図　斜縁神獣鏡の獣像（模式図）

いことをⅡ段階とⅢ段階とを分ける根拠にしたが（村松 2004）、斜縁二神二獣鏡に用いられる獣像には、こちら側（正面）を向くもの、やや斜め前方を向いており、目が両目とも表現されるもの、完全に横を向き、片目しか表現されないものの三種がある（第１図）。斜縁神獣鏡の銘文のうち紋様の配置に言及するものは「青龍在左白虎居右」の類であるが、これらの三種の獣像がそれぞれ何を表わしていたかは判然としない。しかしながら、村松が龍虎の区別が判然としないとした鏡も実は獣像三種のうちの斜め向きのものと横向きのものの二種を用いており、獣像において区別はなされているといえる。これらの三種の獣像はいずれも斜縁二神四獣鏡に見られ、それに由来するものとも考えられる。そうであるとすれば、斜縁二神四獣鏡は斜縁二神二獣鏡より後出のものとは判断しづらくなる。先述の崇実大学校蔵鏡も斜縁二神四獣鏡である。また、一方で梅原や西川が注目した縁部の断面形態も、後述のとおり製作者集団の違いによるものと考えられ､編年の基準になる要素と見ることは出来ない。

以上の事から、本論では斜縁神獣鏡編年の確立を目指し、論を進めていくこととしたい。一方、その系譜に関しては、上野祥史により、「劉氏系」の画像鏡（上野 2001）との関連が指摘されているが（上野 2006）、具体的にどのような変遷をたどり斜縁神獣鏡が創出されたのかは不明である。斜縁神獣鏡の編年のみに限らず、斜縁神獣鏡に至る画像鏡内での変遷に関しても、触れることとしたい。

３．斜縁神獣鏡の定義

斜縁神獣鏡について語るためには、その定義を明確にしなければならない。現在の斜縁神獣鏡の定義は、樋口隆康が斜縁二神二獣鏡を定義したものが元になっている。樋口は斜縁二神二獣鏡を、「内区の主文は四乳の間に二神二獣を配したもので二神はそれぞれ侍仙をともなっている。銘帯があって外区は複波鋸歯文帯からなっている。縁も三角縁に近いものもあるので、三角縁神獣鏡の一類とみなす人もいる。しかし三角縁神獣鏡よりも小型で、径が一六～一二センチぐらいであり、銘文は「幽湅三商」式のものが多く三角縁神獣鏡にはみない式である。縁も三角縁よりは低く、平縁よりも盛り上っているので、両者の中間型式として、斜縁または半三角縁といっている」とした。また、斜縁神獣鏡の集成を示した後で「諸鏡の大半は二神二獣式で、鈕に向って求心的に各像をおいている。二神は被り物のちがいから、東王父、西王母と考えられ、それぞれ脇神をともなっている。これは画象鏡によくみる神人龍虎鏡の図像に由来したものとみることができる。銘は二種ある。

第１表　斜縁神獣鏡集成表

No.	地域	遺跡名	形態	径(cm)	編年	副紋様	銘文型式	銘文文字数	「配像萬彊」	侍仙人数	複線波紋	紋様表現	銘文開始(度)
1	山梨県	小平沢古墳	斜縁二神二獣鏡	13.2	Ⅱ期	雲気2	S	19	×	1	B	③	0
2	長野県	兼清塚古墳	斜縁二神二獣鏡	15.4	Ⅰ期	雲気2	S	24	○	1	なし	③	0
3	静岡県	庚申塚古墳	斜縁二神二獣鏡	16.2	Ⅰ期	雲気1	S	25	○	2	B	③	-30
4	福井県	龍ヶ岡古墳	斜縁二神二獣鏡	10.1	Ⅱ期	不明	なし	なし	－	1	B	③	なし
5	三重県	八重田１号墳	斜縁二神二獣鏡	17.0	Ⅰ期	巴形	不明	不明	－	1	A´	②	不明
6	滋賀県	大塚越古墳	斜縁二神二獣鏡	14.2	Ⅰ期	雲気2	S	20	○	1	B	③	30
7	滋賀県	山ノ上古墳	斜縁二神二獣鏡	18.1	Ⅱ期	雲気3	S	17	×	1	B	③	30
8	京都府	稲荷山三ノ峯古墳	斜縁二神二獣鏡	15.5	Ⅰ期	禽獣	S	24	○	1	B	④	不明
9	京都府	伝　長岡近郊古墳	斜縁二神二獣鏡	14.2	Ⅱ期	不明	S	17	×	1	B	③	30
10	京都府	金比羅山古墳	斜縁二神二獣鏡	15.7	Ⅱ期	雲気3	Pb	16	－	1	A	②	75
11	大阪府	弁天山C1号墳	斜縁二神二獣鏡	14.6	Ⅱ期	雲気4	Pb	14	－	1	A	②	30
12	大阪府	安満宮山古墳	斜縁二神二獣鏡	15.8	Ⅰ期	巴形	Pb	33	－	1	A´	②	45
13	大阪府	伝　石切周辺古墳	斜縁二神二獣鏡	14.5	Ⅱ期	不明	S	18	×	1	B	③	不明
14	大阪府	ヌク谷北塚古墳	斜縁二神二獣鏡	15.9	Ⅱ期	不明	S	18	－	不明	A	①	0
15	大阪府	津堂城山古墳①	斜縁二神四獣鏡	17.9	Ⅰ期	なし	S	不明	○	1	B	③	0
16	大阪府	津堂城山古墳②	斜縁二神四獣鏡	18.0	Ⅰ期	不明	S	不明	－	1	B	③	不明
17	大阪府	和泉黄金塚古墳	斜縁二神二獣鏡	17.4	Ⅰ期	巴形	Pb	48	－	1	A´	②	90
18	大阪府	馬子塚古墳	斜縁二神二獣鏡	13.8	Ⅱ期	雲気2	不明	不明	－	1	B	③	不明
19	兵庫県	ヘボソ塚古墳	斜縁二神二獣鏡	15.1	Ⅰ期	雲気1	S	24	○	1	B	③	0
20	兵庫県	松田山古墳	斜縁二神二獣鏡	15.5	Ⅰ期	禽獣	S	25	○	1	B	③	0
21	奈良県	タニグチ１号墳	斜縁二神四獣鏡	18.2	Ⅰ期	なし	S	27	○	1	B	④	-30
22	奈良県	古市方形墳	斜縁二神二獣鏡	16.8	Ⅰ期	禽獣	S	32	○	2	B	⑤	30
23	奈良県	斑鳩大塚古墳	斜縁二神二獣鏡	15.3	Ⅱ期	巴形	S	18	×	1	B	③	45
24	奈良県	桜井茶臼山古墳	斜縁二神二獣鏡	不明	Ⅰ期	不明	S	不明	－	2	不明	③	不明
25	奈良県	新沢213号墳	斜縁二神二獣鏡	13.3	Ⅰ期	雲気2	Pd	23	－	1	B	③	0
26	奈良県	佐味田宝塚古墳①	斜縁二神二獣鏡	17.1	Ⅰ期	禽獣	S	21	－	2	A	①	-45
27	奈良県	佐味田宝塚古墳②	斜縁二神二獣鏡	14.6	Ⅰ期	雲気2	S	21	○	1	B	③	30
28	奈良県	別所城山２号墳	斜縁二神二獣鏡	不明	Ⅱ期	不明	不明	不明	－	不明	不明	②	不明
29	島根県	造山３号墳	斜縁二神二獣鏡	14.5	Ⅰ期	なし	Pb	24	－	1	A´	②	90
30	岡山県	井原市木之子町	斜縁二神二獣鏡	17.0	Ⅰ期	雲気1	S	25	○	2	B	③	15
31	岡山県	七つグロ７号墳	斜縁二神二獣鏡	15.1	Ⅰ期	雲気1	Pd	21	－	1	B	③	15
32	広島県	石鎚山第１号墳	斜縁二神二獣鏡	15.8	Ⅰ期	禽獣	S	24	○	1	B	③	30
33	山口県	長光寺山古墳	斜縁二神二獣鏡	不明	Ⅱ期	不明	不明	不明	－	不明	不明	不明	不明
34	香川県	岩崎山４号墳	斜縁二神四獣鏡	17.8	Ⅰ期	なし	S	22	○	1	B	③	30
35	徳島県	天河別神社４号墳	斜縁二神二獣鏡	16.7	Ⅰ期	不明	Pb	27	－	1	A	②	45
36	徳島県	天河別神社５号墳	斜縁二神二獣鏡	16.5	Ⅰ期	不明	S	不明	○	1	B	③	不明
37	愛媛県	朝日谷２号墳	斜縁二神二獣鏡	15.2	Ⅰ期	禽獣	S	27	○	1	B	③	0
38	愛媛県	大相院遺跡	斜縁二神二獣鏡	16.5	Ⅰ期	不明	不明	不明	－	不明	A	不明	不明
39	福岡県	五島山古墳①	斜縁二神二獣鏡	14.0	Ⅰ期	不明	Pd	27	－	1	B	③	不明
40	福岡県	五島山古墳②	斜縁二神二獣鏡	12.2	Ⅱ期	雲気2	S	16	×	1	B	③	30
41	佐賀県	伝　神埼郡	斜縁二神二獣鏡	15.6	Ⅱ期	不明	S	16	×	1	B	③	0
42	大分県	免ヶ平古墳第一主体部	斜縁二神二獣鏡	16.2	Ⅰ期	雲気2	Pd	36	－	1	A´	②	30
43	大分県	免ヶ平古墳第二主体部	斜縁二神二獣鏡	15.8	Ⅱ期	雲気2	S	17	×	1	B	③	0
44	不明	(五島美術館蔵)	斜縁二神四獣鏡	17.4	Ⅰ期	雲気2	S	25	○	1	B	③	15
45	不明	(京都国立博物館蔵)	斜縁二神二獣鏡	15.5	Ⅰ期	禽獣	Pd	不明	－	1	B	③	-30
46	中国	山東省章丘市徴集	斜縁二神二獣鏡	16.0	Ⅱ期	なし	Pa	15	－	1	B	⑦	60
47	中国	伝　河南省洛陽	斜縁二神二獣鏡	16.4	Ⅱ期	なし	Pb	16	－	2	A	①	0
48	中国	伝　浙江省	斜縁二神二獣鏡	14.5	Ⅰ期	雲気1	S	19	○	1	B	③	15
49	北朝鮮	貞梧洞12号墓	斜縁二神二獣鏡	14.0	Ⅰ期	雲気1	Pd	20	－	1	B	③	不明
50	北朝鮮	大同江面梧野里	斜縁二神二獣鏡	14.2	Ⅰ期	雲気2	S	22	○	1	B	③	30
51	北朝鮮	大同江面石巌里①	斜縁二神二獣鏡	15.6	Ⅰ期	雲気1	S	24	○	1	B	③	15
52	北朝鮮	大同江面石巌里②	斜縁二神二獣鏡	11.1	Ⅱ期	雲気4	なし	なし	－	1	B	③	なし
53	北朝鮮	伝　楽浪	斜縁二神四獣鏡	14.1	Ⅰ期	禽獣	Pd	40	－	1	B	⑥	45

「吾作明竟　幽湅三商　競徳序道　配像万彊　曽年益寿　子孫番昌」(S 式銘の簡略式)

「吾作明竟自有紀　令人長命宜孫子」(Pb 式銘)」と述べた（樋口 1979)。

これに村松洋介は「最外周に外周突線を持つものが全体の 90%以上である」という特徴を加え、さらに、銘文には「吾作明竟自有道・・」と続く Pd 式も存在することを示した（村松 2004)。

筆者も、基本的には樋口の定義を踏襲してよいものと考える。但し面径に関しては、16cm を超える鏡が６面（およそ２割）あり、二神二獣鏡で最大 18.1cm のものがある一方で、銘文はないが紋様表現から確実に斜縁神獣鏡の一種と考えられる径 10.1 cmのものもあるので、18 ～ 10cm 程度、としたい。外周突線については、村松が外周突線を持たないとする伝洛陽出土鏡は、写真により観察すればヌク谷北塚古墳鏡と同様に不明瞭ではあるが外周突線を持っており、斜縁神獣鏡に確実に外周突線を持たない例は存在しないということができる。それで、下記①～⑥をもって、斜縁神獣鏡の定義とすることにする。

銘文	古墳編年（大賀）	三角縁神獣鏡（福永）	倭製鏡（下垣）
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　曽年益壽　宜孫子	前Ⅳ期	－	－
□作明竟　幽□三商　□□□道　配像萬彊　曽年益□　子孫□昌	中Ⅲ期	－	Ⅳ段階
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬京　曽年益壽　子孫番昌分	前Ⅴ期	－	－
なし	前Ⅶ期	－	－
不明	前Ⅶ期	－	－
吾□□竟　□□三□　統徳序道　配像萬彊　子孫番昌	前Ⅶ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　曽年益壽　子	前Ⅴ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫□昌	前Ⅲ期	－	Ⅰ段階
吾・・・序□　曽年益□　子	前Ⅶ期	倣製Ⅱc	Ⅲ段階
吾作明竟自有紀　令人長命宜孫子　大吉	中Ⅰ期	－	－
吾作明竟自有孫子大吉利宜子孫	前Ⅳ期	舶載D	Ⅱ段階
吾作明竟自有紀　青龍白虎居左有　令人長命宜子孫　作吏高遷車生栄耳　作師長命吉	前Ⅱ期	舶載B	－
吾□明竟　幽湅三□　□□□道　曽□□□　宜子	不明	－	－
□□明□　□□三□　□吉　□宜□孫　□宜□官	前Ⅵ期	倣製Ⅲ	－
・・・竟　幽湅三商　□□□□　配象萬彊　曽・・・	前Ⅶ期	－	Ⅴ段階
吾・・・□財□・・・亦王母□　鸞鳳・・・昌□	前Ⅶ期	－	Ⅴ段階
周是作竟自有紀　令人長命宜孫子　五男二女・・・（25字不明）・・・天王日月子	前Ⅶ期	－	－
・・・孫子・・・	前Ⅶ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌	前Ⅳ期	舶載C	－
吾作明竟　幽湅三商　□徳序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌　分	前Ⅵ期	－	－
吾作明竟　幽練三商　統徳序道　配象萬彊　曽年益壽　子孫番昌　楽未央	前Ⅴ期	－	－
吾作明竟　幽練三商　□□序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌　功成事見　其師命長	前Ⅵ期	－	Ⅳ段階
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　曽年益壽　宜子	前Ⅶ期	－	Ⅴ段階
・・・湅・・・	前Ⅲ期	舶載C	Ⅰ段階
吾作明竟自有道　東王公西王母　青龍在左白虎居右　宜子	前Ⅵ期	－	Ⅲ段階
吾作明竟　幽湅三商　□吉□□　高官□□　侯長　宜子孫	前Ⅶ期	倣製Ⅰ	Ⅴ段階
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益　孫子	前Ⅶ期	倣製Ⅰ	Ⅴ段階
不明	前Ⅵ期	－	－
吾作明竟自有紀　令人長命宜孫子　作吏高遷車生栄耳　宜気	前Ⅵ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌分	不明	－	－
吾作明竟自有道　東王西王母　曽年益壽　子孫番昌　分	不明	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌	前Ⅳ期	－	－
あり（日？）	前Ⅴ期	倣製Ⅱa	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　宜子	前Ⅵ期	－	－
吾作明竟□□□□□□□□□□□□□□□□見人大吉□長□子孫	前Ⅱ期	－	－
・・・湅□□　□□□道　□象萬彊　□年・・・	前Ⅱ期	－	－
吾□□□　□湅□商　統徳序道　配像萬彊　曽年益□　子孫番昌　楽未央	前Ⅱ期	－	－
・・・長　宜・・・	前Ⅰ期	－	－
吾作明竟自有道　青龍在左白虎在右　東王父西王母　長宜孫子大吉	前Ⅳ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　曽年益壽　子孫番昌	前Ⅳ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　會年益　子	不明	－	－
吾作明□□□□龍□□□□□□□□□□□□孫□□□□□□□□□□□□□□□□□師命長□	前Ⅴ期	倣製Ⅱa	－
□□明竟　幽湅三商　□徳序道　曽年益壽　子	前Ⅴ期	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配象萬彊　曽年益壽　子孫番昌　分	－	－	－
・・・自有道　尚有東王公西王母　師子白虎居左右　長・・・	－	－	－
上方作竟自有紀　樟去非詳宜子孫分	－	－	－
吾作明竟自有紀　令人長命宜孫子大吉	－	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳□道　配像萬彊　宜孫子	－	－	－
青盖作竟自有道　東王公□西王母　曽年益壽孫子	－	－	－
吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　配像萬彊　曽年益壽　宜子	－	－	－
吾作明竟　幽湅□□　□□□□　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌	－	－	－
なし	－	－	－
青盖作竟自有紀　上有東王公西王母　青龍在左白虎居右　仙人子喬赤松子　長保二親宜孫子　大吉昌	－	－	－

①内区の主紋は乳間に二神と二獣もしくは四獣を求心的に配し、二神はそれぞれ侍仙を伴う。

②銘帯があって外区は通常、鋸歯紋－複線波紋－鋸歯紋の紋様帯からなる。

③銘文は「吾作明竟」に始まるものが多い。

④縁は三角縁よりは低く、平縁よりも盛り上がる斜縁である。

⑤径は 18 ～ 10cm 程度である。

⑥最外周に外周突線を持つ。

①にあるように、内区の主紋が二神に四獣を配する斜縁二神四獣鏡も、その図像紋様の関連性の深さから、斜縁神獣鏡に含める。一方、求心式のもののみを斜縁神獣鏡に含め、同向式のものは含めない。斜縁神獣鏡は画像鏡をもとに創り出されたと考えられているが（樋口 1979）、樋口が斜縁神獣鏡に含める同向式二神二獣鏡（鳥取県国分寺古墳鏡[6] など）は、斜縁神獣鏡とは紋様表現が異なっており、筆者は画像鏡段階の鏡であると考えている。求心式

に配するものでも島根県寺床１号墳出土鏡などは扱いを慎重にした方がよい（村松 2004）。これらの鏡も斜縁神獣鏡とは主紋様の表現が異なり、内外区の紋様には画像鏡の要素を持っており、むしろ画像鏡に含めた方が良いものと考える。求心式のこれらの鏡の位置づけに関しては、のちに詳しく述べることにする。

以上の定義に当てはまる、管見に及んだ斜縁神獣鏡は、日本列島出土のもののほか、中国大陸、朝鮮半島出土のものを含め、第１表にあげた 53 面である[(7)]。なお、樋口隆康によれば、このうち大阪府津堂城山古墳出土鏡①と香川県岩崎山４号墳出土鏡とは同型であるという（樋口 1979）。

４．斜縁神獣鏡編年の視点

編年においては、内区の主紋様など製作者の意識が集中しやすい部分よりも、その意識が集中しないような部分に、より説得力のある型式学的指標が隠されていることが少なくない（新納 1991）。斜縁神獣鏡においてもこれはあてはまることで、紋様のうちあまり注意が及ばない部分に、編年の指標となりうるものが複数確認できた。

副紋様　斜縁神獣鏡には主紋様である神像・侍仙、そして獣像のほかに、内区を求心的に見た乳の下部に別の紋様を持つものが多い。この紋様を仮に副紋様と呼ぶことにする。副紋様には大きく分けて、天上世界の生物をあらわしたと思われる禽獣紋様、天上世界に散在するという「雲気」（林 1989a）を表現したと考えられる巻いた線状の紋様のほか、出所不明の巴形の紋様の三種がある（第２図）。これらのうち雲気紋様はその表現からさらに１～４の四種に細分できる。

雲気１は、三本の曲線で表現され、そのうちの一本からはさらに気が伸びる。この表現の説明は先学にないが、何らかの意味がある表現であったと考えられる。

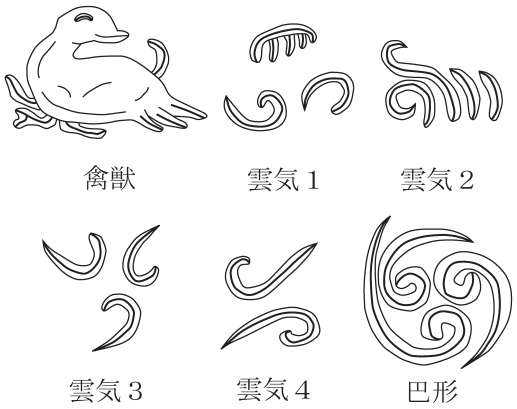
雲気２は雲気１とは異なり、出所が明らかである。すなわち雲気２はその位置から、神や獣から発される雲気を表現したと思われる。四本程度の線描きで表現され、この雲気を発している神や獣の側は線が短く、遠いほど線は長くなるものが多い。

雲気３は､雲気１の一本からさらに伸びていた気の表現の意味が変化したものと思われる。また、巴形紋様から変化したと考えられるものもある。三本の曲線のみで表現される。

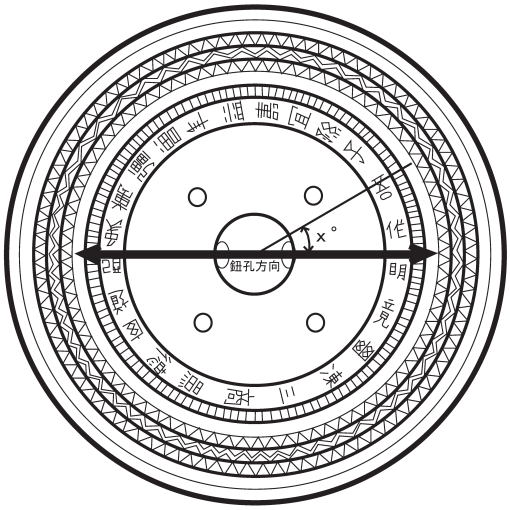
雲気４は、雲気１（もしくは雲気２）の一部を取り上げ紋様化したものであろう。二本の曲線で表現される。

銘文　銘文の分類に関しては、樋口隆康の研究（樋口 1979）に従う。斜縁神獣鏡に見られる銘文は、樋口および村松のあげた「吾作明竟　幽湅三商…」と続くＳ式、「吾作明竟自有紀　令人長命宜孫子…」と続く Pb 式、「吾作明竟自有道　青龍在左白虎居右…」の Pd 式のほか、「上方作竟自有紀…」とある Pa 式もある。

銘文の開始点　鈕孔を施したその延長線上から、銘帯の銘文の開始点が約何度ずれているかを見たものである（第３図）。これまで鈕孔に関しては、その形態や（福永 1991）、主紋様との関係で見た鈕孔方向（村松 2004）などに意義が見出されてきたが、斜縁神獣鏡におい



第２図　副紋様（模式図）



第３図　銘文の開始点（図は 30°）

ては銘文の開始点との関係においても意義を見出すことが出来た。15 度間隔で見ると、斜縁神獣鏡の銘文の開始点は -30° ～ 30° の範囲のものが多いが、一部に逸脱するものもある。ただし、この要素にはいわゆる踏返しの問題も絡んでくるため、副次的に扱いたい[8]。

侍仙の人数　神像の脇侍の人数である。２人と１人とがある。

複線波紋　複線波紋の形状である。村松洋介はその形状を２類に分けた（村松 2004）。すなわち、

　Ａ類：波紋の開きが大きく角度が明らかに鈍角なもの。

　Ｂ類：波紋の開きが小さく角度がやや鋭角なもの。

の２類である。基本的にこれに従うがＡ類のうち菱形珠点をつけるものをＡ´類として細分する。

紋様表現　紋様表現の差異は製作者集団の違いを反映する（岸本 1989）。これは斜縁神獣鏡においても言えることである。既に村松洋介により分類されており（村松 2004）、今回はそれをそのまま利用することにする。ただし、村松が取り上げていない鏡で、その図像表現分類に当てはまらないものがあり、新たに表現⑥、表現⑦を設定した。

　表現⑥は、全体的に細身の表現が目立つ。神像は顔が縦長で、首は傾けないが若干向かって右を向いている。雲気はくねることなく真っ直ぐ伸びる。侍仙には羽が生えている。東王父は王冠状の三山冠をかぶる。その脇の侍仙は東王父に向かって今にも駆け上がらんとするような姿勢である。西王母は半円形の冠帽をかぶる。侍仙は東王父側と同じような形状で、西王母の方を向き膝立ちで何かを捧げ持つようにしている。獣像は他の表現に見られる正面を向くもの、横向きのもの、斜め向きのものの他に後ろを向くものを加えた４種がある。獣像の肩には羽状の表現がある。横向きと斜め向きの獣像には牙がある（第４図）。

　表現⑦は、全体的に平行線を連ねる表現が目立つ。神像はどちらも手の表現が確認できず、衣服は襟の表現から右側を前にして重ねる。雲気の本数が少ない。東王父は三山冠が三本の線で表現され、口の脇からナマズのように髭が飛び出す。西王母は髷を結っている。侍仙は

第４図　表現⑥の紋様

第５図　表現⑦の紋様

頭が小さく身体も細いが腕部と腿部ばかりが太い。獣像はどちらも歯が無く、両足の指が線彫りのみで表現される。その指には骨のような節があり、爪は鍵爪である。左前足が極端に曲がっている（第５図）。

５．斜縁神獣鏡の編年

以上の要素から、斜縁神獣鏡の変遷を考察していこう。まず注目したいのは副紋様である。副紋様は、内区紋様の中でも副次的な要素の強いもので、描かれる紋様は基本的に要素の省略化の方向で変遷していったと見ることが出来る。禽獣紋様は、描かれる禽獣像が何種かあり、副紋様の中で最も複雑な紋様である。これは古相の副紋様である可能性が高い。雲気紋様のうち同一系譜と考えられる雲気１・３・４において、雲気１は紋様として意味のあることがその配し方から読み取れるが、雲気３・４では紋様省略化の傾向が顕著である。雲気２に関しては、雲気の中でも普遍的に見られるものであり、そこに段階差は見出せない。巴形紋様は円を描くように三本の曲線を配するのが特徴で、丁寧に正円に近い円を描くことから、同様に三本の曲線をもって構成される雲気３と比べ、丁寧さの点でより古い要素とみることが出来る。以上のことから禽獣紋様、雲気１、巴形紋様は古い構成要素、雲気３・４は新しい構成要素であると考えられる。

次に銘文に関して見てみよう。斜縁神獣鏡において最も多く見られる銘文はＳ式である。このＳ式銘は省略が多いが、その省略化は特徴的といえる。例えば、奈良県古市方形墳出土鏡では「吾作明竟　幽湅三商　□□序道　配像萬彊　曽年益壽　子孫番昌　功成事見　其師命長」とあるが、それが伝佐賀県神埼郡出土鏡では「吾作明竟　幽湅三商　統徳序道　曽年益　子」とかなりの部分が省略されてしまっている。ではこのような省略は何の決まりもなくただ無作為に行われていたのかというとそうではない。結論から言えば、省略された短い銘文数のものでは、「配像萬彊」の語句が必ず抜かされている。この、「配像萬彊」の有無から、銘文の文字数に関してみてみると、「配像萬彊」を持つものは、19 字以上の長文のものに限定され、一方持たないものはそれ以下の比較的文字数の少ないもののみである（第２表）。このようにＳ式の「配像萬彊」の有無から、約 20 字というのが、長文のものと短文のもの

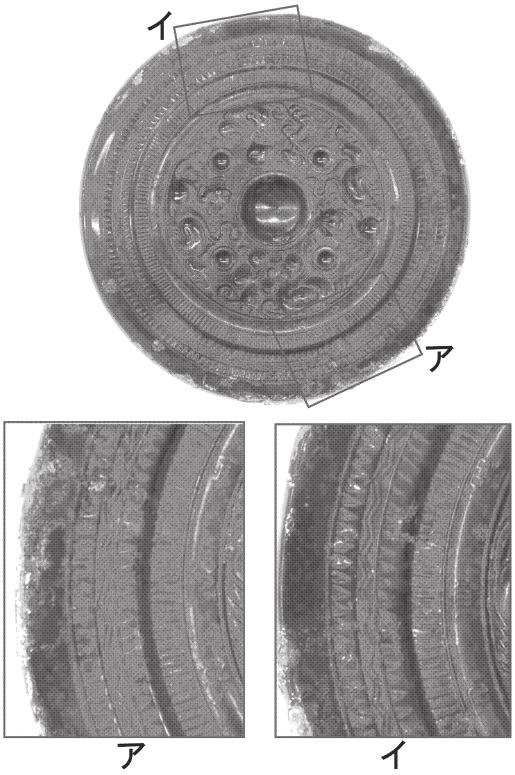
とを分ける目安になることがわかる。

次に、侍仙の人数である。人数が２人いるものは、人数の省略化という点で１人のものよりある程度先行すると見て差し支えなかろう。ただし、この要素は副次的なものであるとみる。

次に、複線波紋に関して見てみたい。複線波紋にはＡ類とＢ類があるが、村松洋介は、Ａ類は割付を行なってから施紋され、一方のＢ類はランダムに施紋されるとして、Ａ類からＢ類への変遷を想定した（村松 2004）。しかしこの点は是認しがたい。例えば第６図のアのようにＡ類の複線波紋を持つ京都府金比羅山古墳出土斜縁二神二獣鏡の複線波紋では、通常のＡ類よりピッチが狭く、むしろイのようにＢ類に近い部分がある。このようなあり方は、この鏡のみでなく他の鏡においても認められる。もしＡ類が、ピッチの頂点に割付を行なってから施紋していたのであれば、このようなピッチの違いは出現せずもっと整ったものであったと思われる。このことから、複線波紋Ａ類とＢ類には、実は技術差はなく、両者の違いは時期差ではないということがわかる。では、時期差でなければ何なのか。Ａ類は表現①・②の鏡に限られ、Ｂ類は表現③～⑦の鏡に限られる。岸本直文は三角縁神獣鏡の紋様表現の差異は製作者集団の違いを反映するとしたが（岸本 1989）、これは斜縁神獣鏡においても当てはまると考えられる。表現の差が製作者集団の系統差であるということは、複線波紋の違いも製作者集団の系統差であるということが出来よう。ところで、Ａ類の中には、珠点をもつＡ´類が存在する。この点に関しては、紋様の簡略化を時期差としてＡ´類とＡ類を比較すれば、菱形珠点の省略という方向性での変遷を認めることができる。

第２表　「配像萬彊」の有無と文字数の関係
（数字は鏡の面数）

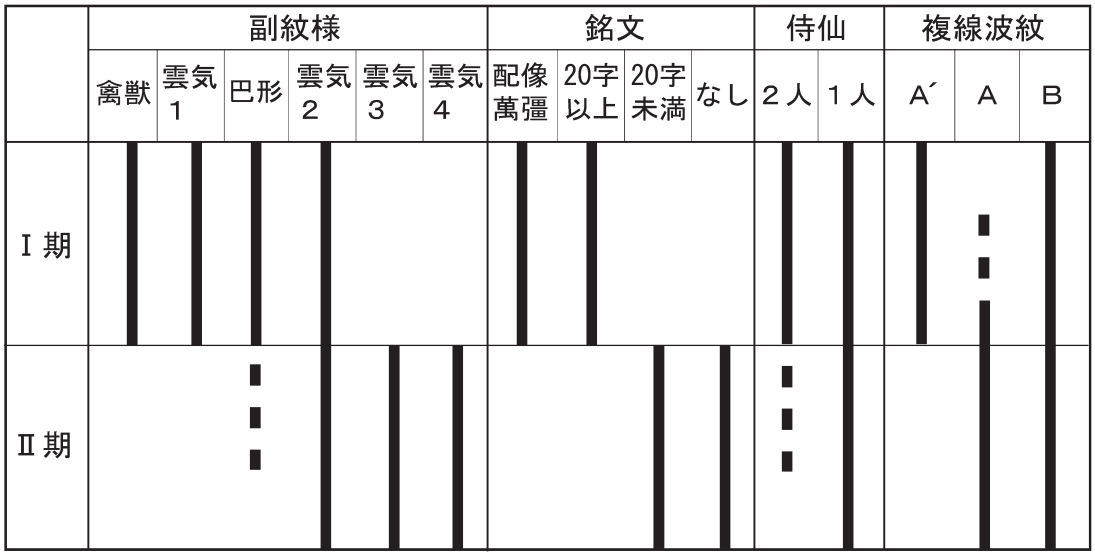
	「配像萬彊」	
銘文文字数	○	×
32	1	
27	2	
25	4	
24	5	
22	2	
21	1	
20	1	
19	1	1
18		2
17		3
16		2



第６図　金比羅山古墳出土鏡の複線波紋

以上の要素を組み合わせれば、斜縁神獣鏡をⅠ期とⅡ期の二つの段階に分けることができる（第７図）。

斜縁神獣鏡Ⅰ期は、Ｓ式銘の銘文においては「配像萬彊」の語を含む一群である。それ以外の銘文型式のものでも、他の要素との組み合わせから見て、字数約 20 字以上のものがこの時期の所産と見て差し支えない。副紋様のうち禽獣紋様と雲気１および巴形紋様を持つも



第７図　斜縁神獣鏡の編年概念図

のはほとんどがこの時期である。侍仙を２人配するものも基本的にはこの時期である。また複線波紋A´類を持つものもこの時期のみのものである。紋様表現は、表現①～⑥の鏡が見られる。この時期の資料は 35 面であった。典型的な資料として奈良県古市方形墳出土鏡をあげうる。出土面数から見ても、紋様表現の多様さから見ても、この時期が斜縁神獣鏡の製作がもっとも活発であった可能性は高いものと思われる。なお、二神四獣鏡はこの時期に限られ、二神四獣は二神二獣よりも相対的にむしろ古い可能性が高い。

斜縁神獣鏡Ⅱ期は、S式銘の銘文において「配像萬彊」の語を省略する一群が基本である。他の銘文型式においても、字数が約 20 字未満のものになる。副紋様のうち雲気３と雲気４はこの時期にしか見られない。また面径が非常に小さく銘文を持たない２例はいずれもこの時期のものである。紋様表現は、表現①～③と表現⑦が見られる。この時期の資料は 18 面であった。典型例として、京都府金比羅山古墳出土鏡などがあげられよう。紋様・銘文の省略や、紋様表現もやや限られてくることなどから、この時期には斜縁神獣鏡製作は衰退の一途にあったことが見て取れる。

梅原末治や西川寿勝による変遷観の基準となった縁部断面形態の違いに関しては、これは挽き型の形状の違いに起因するものであるが、仮に、断面が鋭く立ち上がる三角縁に近いものを断面Ｘ、断面があまり立ち上がらずいわゆる平縁に近いものを断面Ｙとすれば、断面Ｘは表現①・②と組み合い、断面Ｙはそれ以外の表現③～⑤と組み合う（第３表）。このことから、縁部断面形態の違いも複線波紋Ａ類とＢ類の違いと同様製作者集団の系統差と考えることができるだろう[9]。この、製作者集団の違いに起因する要素としては、ほかに銘文の開始点という要素も該当する。第４表を見れば、表現ごとに鈕孔と銘文の開始点の位置関係が異なっていることがわかる。数の多い表現③はほとんど -30° ～ 30° の範囲に収める一方、表現②は 30° ～ 90° と角度をあける傾向がある。表現①は -45° ～ 0° であり、このように、紋様表現によって銘文の開始点も異なっていることが見て取れる。この他の表現はいずれも

鈕孔方向がわかる例が１例しかないが、銘文の開始点から見ればこのうち特に表現④・⑤は表現③との関連が深そうだ。複線波紋がいずれもＢ類であることもこれを裏付けよう。

第３表　縁部断面形状と紋様表現の関係
（数字は鏡の面数）

	紋様表現				
断面形状	①	②	③	④	⑤
X	2	6			
Y			18	1	1

第４表　銘文の開始点と紋様表現の関係
（数字は鏡の面数）

	紋様表現						
銘文開始(度)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
-45	1						
-30			2	1			
0	2		9				
15			5				
30		2	8		1		
45		2	1			1	
60							1
75		1					
90		2					

６．画像鏡との関連

ところで、斜縁神獣鏡は画像鏡をもとに生み出されたと考えられるが（樋口 1979）、日本列島出土の画像鏡の中には、通常の画像鏡とは異なり、半肉彫りの神獣像表現を持つものが少なくない。通常画像鏡は割合平滑な神獣像の表現をもっており、それらの鏡は画像鏡に含めるべきではないのかもしれないが、内外区表現の関連性の深さから、やはり画像鏡に含めておきたい。これらの半肉彫り像をもつ「画像鏡」は斜縁神獣鏡の成立に深く関わっていると思われる。そこで、ここでは画像鏡と斜縁神獣鏡の関連について考えてみたい。

高部 30 号墳出土鏡　直径 14.6cm の神人龍虎画像鏡である。銘文は「□□□鏡　好潔無疆　服者賢奉敬良　子孫番昌□」である。外区紋様は獣紋であり、内区神獣像に対応する位置には五銖銭紋などを配する。神像はいずれも頭部・体部とも正面を向いている。神獣像は半肉彫りで、上野分類（上野 2001）との対応関係は不明である。

大和天神山古墳出土鏡　直径 16.8cm の神人龍虎画像鏡である。銘文は「劉氏作明竟　自有□同出丹□　□師得同　合湅五金　服者敬奉臣良　巧刻」とある。外区は連続三葉紋である。神獣像は半肉彫りで、上野分類との対応は不明である。内区神像脇に「西王母」の銘題がある。

西求女塚古墳出土鏡　直径 18.5cm の神人龍虎画像鏡である。銘文は「田氏作明鏡□□□有　服者男為公卿女為諸王　曽年益寿　子孫番昌　千秋万歳不知老　長宜賈市兮」である。外区は鋸歯紋－複線波紋－鋸歯紋である。上野分類の円圏Ⅱ式であるが、獣像表現が半肉彫りとなっている。

寺床１号墳出土鏡　直径 13.0cm の神人龍虎画像鏡である。銘文は「劉□竟□奇　□□□□　□□無傷　□□知老　呆二親得点□」である。外区は連続三葉紋である。神獣像は半肉彫りで、上野分類との対応は不明である。

これらの鏡のうち、特に高部 30 号墳出土鏡や寺床１号墳出土鏡などは、以前から斜縁神獣鏡との関連が指摘されており、斜縁神獣鏡の一種とされたこともある（国立歴史民俗博物館編 1994 など）。

まず高部 30 号墳出土鏡を見てみると、その獣像表現は半肉彫りで躍動感に優れている。獣像は横を向き目が片側しか表現されないものと、やや斜め前方を向き両目とも表現されているものの二種があり、報告ではそれぞれ青龍および白虎に比定されている（西原編

2002)。このような横向きと斜め向きの獣像をもつ鏡は、画像鏡のうちデフォルメ神獣Ｂ式やデフォルメ神獣Ｃ式（上野 2001）に多いが、斜縁神獣鏡にも同様の例が存在しており、各鏡の関連が想定できる。

次に西求女塚古墳出土鏡を見てみたい。この鏡については、既に上野祥史が検討を行なっている（上野 2006)。この鏡は半肉彫りの獣像を持つが、上野によれば、この鏡の獣像表現は、対置式神獣鏡のⅢａと非常に似通っているという。また、斜縁神獣鏡の獣像表現とも共通する部分があり、両鏡と関連が想定できるという。

次いで大和天神山古墳出土鏡を見てみよう。この鏡の神像は、侍仙の方に若干体を向ける。このような表現は斜縁神獣鏡のほとんどに見られるものである。また、この鏡の西王母には「西王母」と銘題が入るが、奈良県の古市方形墳出土斜縁神獣鏡にも同様に「王母」の銘題がある。

最後に寺床１号墳出土鏡を見てみよう。この鏡の獣像のうち一方は正面を向き、その表現は西求女塚古墳出土鏡のものに近い。もう一方はやや斜め前方を向き、この正面向きと斜め向きの獣像の組み合わせは斜縁神獣鏡では 27 例あり、最も多く見られる。またこの鏡の神像も大和天神山古墳出土鏡と同様に侍仙の方に体を向けた表現をしており、ここからも斜縁神獣鏡との関連が想定できる。高部 30 号墳鏡・大和天神山古墳鏡・寺床１号墳鏡の西王母に見られる冠帽は、崇実大学校蔵伝楽浪出土鏡のものに酷似している。

このように、画像鏡のうち半肉彫りの図像表現を持つものは、斜縁神獣鏡と密接に関連することが分かった。だがこれだけではその前後関係が分からないままである。そこで、先に注目した要素のうち銘題と冠帽について見てみたい。銘題は、画像鏡では多くの鏡に見られるものである。しかし斜縁神獣鏡では先に示した１例にしか見られない。これは冠帽についても同様である。このことから、もともと画像鏡にあったこれらの要素が、斜縁神獣鏡に取り入れられたと見ることができよう。ここであげた古市方形墳出土および伝楽浪出土の斜縁神獣鏡は、いずれも前述した編年の斜縁神獣鏡Ⅰ期の鏡で、銘文や紋様表現から見ればその中でも古手である可能性が高い。画像鏡の要素は斜縁神獣鏡成立直後にのみ強く現れていると見ることが可能である。

画像鏡から斜縁神獣鏡への過渡期にあった以上の四面の鏡のうち、斜縁神獣鏡により近いのは、神獣像ともにいっそう斜縁神獣鏡との関連を見出せる、高部 30 号墳出土鏡および寺床１号墳出土鏡であろう。このうち寺床１号墳出土鏡は、他の先行する二面からそれぞれ神像および獣像を取り入れた可能性がある。

これらの鏡と他の画像鏡との関連については、銘文に「劉氏」銘があることから、岩本崇に従い、上野のいう「劉氏系」との関連を想定しておく（岩本 2003)。この「劉氏系」の鏡は、華北東部地域での生産が想定されているが（上野 2001)、これは斜縁神獣鏡の分布とも重なっている（森下 2007b)。

以上をまとめれば、斜縁神獣鏡は「劉氏系」の画像鏡に半肉彫り表現が取り入れられ、それからさらに外区紋様や銘文などを定型化させて成立したものであると言うことができよう。

第５表　三角縁神獣鏡編年と斜縁神獣鏡編年の関係
（数字は資料数）

	斜縁神獣鏡編年	
三角縁神獣鏡編年（福永）	Ⅰ期	Ⅱ期
舶載B	1	
舶載C	2	
舶載D		1
倣製Ⅰ	2	
倣製Ⅱa	1	1
倣製Ⅱc		1
倣製Ⅲ		1

第６表　倭製鏡編年と斜縁神獣鏡編年の関係
（数字は資料数）

	斜縁神獣鏡編年	
倭製鏡編年（下垣）	Ⅰ期	Ⅱ期
Ⅰ段階	2	
Ⅱ段階		1
Ⅲ段階	1	1
Ⅳ段階	2	
Ⅴ段階	4	1

７．出土古墳からみた斜縁神獣鏡の変遷

さて、以上に斜縁神獣鏡の変遷を考えてみたが、これを共伴遺物や出土遺跡・古墳との関わりから見たときに齟齬が生じる場合、編年私案は机上の空論との指摘を受ける可能性もある。そこで、ここではその妥当性を検証したい。

まず遺物から見てみるが、斜縁神獣鏡の出土する、古墳時代前期全体を網羅する遺物というのは意外と少ない。そこでここでは三角縁神獣鏡、倭製鏡[10]から筆者の斜縁神獣鏡編年を検証してみる。なお、三角縁神獣鏡や倭製鏡を複数出土した古墳については、それらのうち一番新しい鏡式との組み合わせにより考察を行った。

三角縁神獣鏡編年は、数種の編年が提示されているが、ここでは福永伸哉のものを用いる（福永 1994、2005）。第５表は、三角縁神獣鏡の編年と斜縁神獣鏡の編年との関係を見たものである。この表を見ると、斜縁神獣鏡Ⅰ期の鏡は、舶載Ｂ・Ｃ段階の三角縁神獣鏡と組み合うことがあるが、斜縁神獣鏡Ⅱ期の鏡は、舶載Ｄ段階以降の鏡としか組み合わない。さらに、斜縁神獣鏡Ⅰ期では倣製Ⅱａ段階[11]までの三角縁神獣鏡としか組み合わないのに対し、斜縁神獣鏡Ⅱ期では倣製Ⅱｃ段階以降の鏡とも組み合う。このように三角縁神獣鏡から見れば、私案の斜縁神獣鏡の二つの段階の違いは確かに時期差であるということが出来よう。

次に、倭製鏡編年から検証してみる。倭製鏡編年については、下垣仁志によるものを用いる（下垣 2003a）。第６表は倭製鏡の編年と斜縁神獣鏡の編年との関係を見たものである。これによれば、斜縁神獣鏡Ⅰ期では倭製鏡Ⅰ段階の鏡とも組み合うが、斜縁神獣鏡Ⅱ期では倭製鏡Ⅱ段階以降の鏡としか組み合わない。一方斜縁神獣鏡Ⅰ期、Ⅱ期ともに倭製鏡Ⅴ段階の鏡と組み合い、倭製鏡から見ると斜縁神獣鏡Ⅰ期とⅡ期の鏡の終わりに差は見られない。しかし、斜縁神獣鏡のそれぞれの時期の鏡の出現に差が見られることは確かである。鏡がいわゆる「伝世」のなされることがある器物であることを考え合わせ（森下 1998）、さらに「踏返し」の可能性も考慮に入れるならば[12]（立木 1994）、斜縁神獣鏡編年と倭製鏡編年とに整合性がないとまでは言うことは出来ない。むしろ斜縁神獣鏡Ⅰ期とⅡ期の鏡の出現に差があることを重視すれば、筆者の編年はある程度整合的であるということが出来よう。

このように他の出土遺物編年から見て筆者の斜縁神獣鏡編年は妥当なものであるということを示しえた。最後に出土遺跡・古墳の時期から筆者の斜縁神獣鏡編年の有効性を検証してみたい。古墳時代の編年には数種があるが、ここでは基本的に大賀克彦のものを用いること

第７表　古墳編年と斜縁神獣鏡編年の関係
（数字は資料数）

	斜縁神獣鏡編年	
古墳編年（大賀）	Ⅰ期	Ⅱ期
前Ⅰ期	1	
前Ⅱ期	4	
前Ⅲ期	2	
前Ⅳ期	3	3
前Ⅴ期	3	3
前Ⅵ期	5	2
前Ⅶ期	7	4
中Ⅰ期		1
中Ⅲ期	1	

にする（大賀 2002）。大抵の古墳は大賀編年の時期をそのまま用いるが、一部に理解が異なる古墳も含まれる。例えば五島山古墳は、大賀は中国製鏡のみのセットで三角縁神獣鏡が含まれないことからその古墳編年の前Ⅰ期に位置づけている。しかし五島山古墳出土の無茎銅鏃には十字鎬を持つものが含まれ、高田健一は十字鎬を新しい要素と見ている（高田 1997）。また近年の無茎銅鏃編年において、五島山古墳出土の無茎銅鏃は椿井大塚山古墳出土の無茎銅鏃よりも新しく位置づけられている（大谷 2005、石貫 2007）。以上から、銅鏃から見れば五島山古墳を椿井大塚山古墳よりも古く位置づけることは困難であるとみられる[13]。それで、五島山古墳については前Ⅲ期とされる椿井大塚山古墳より新しい前Ⅳ期に位置づけておきたい。

ところで、筆者の理解には、大賀が直接触れていない古墳にも従来の理解と異なる古墳が存在するのでこれについても触れておく。徳島県天河別神社古墳群は、４号墳と５号墳から斜縁神獣鏡が出土している（秋山 1976）。このうち４号墳は、以前は「墳丘」より須恵器が出土したことから中期後半の古墳とされていたが（菅原編 1980）、近年の調査で同じ天河別神社古墳群の１号墳が前期前葉にさかのぼる古墳であることが明らかとなっており（森 2006）、４号墳および５号墳もそれと同様の時期を考えておく。天河別神社古墳群の付近には弥生時代にさかのぼる萩原墳墓群があり、これらを一括した古墳・墳墓群として捉える考えがあることもその傍証となりえる（森 2006）。なお、４号墳が前期にさかのぼる古墳である可能性は既に指摘されている[14]（橋本 2000）。

以上の理解で、古墳編年と筆者の斜縁神獣鏡編年との関係を見てみたい。第７表を見れば、斜縁神獣鏡Ⅰ期の鏡は、前Ⅲ期以前の古墳からも出土する場合が一定量存在するが、一方の斜縁神獣鏡Ⅱ期の鏡は、前Ⅳ期以降の古墳からしか出土しないことがわかる。また斜縁神獣鏡Ⅰ期の鏡は基本的に前期の範囲内で副葬が終了しているが[15]、斜縁神獣鏡Ⅱ期の鏡は一部中Ⅰ期まで残っている。このように、古墳編年から見ても、筆者の斜縁神獣鏡編年で分けた各段階は、確かに斜縁神獣鏡内における時期差を示しているということが出来よう。

８．おわりに

以上のように、斜縁神獣鏡について考察してきた。斜縁神獣鏡の構成要素の中から、特に副紋様、銘文、侍仙、複線波紋の各要素を抽出し、これに他の要素も絡めてⅠ期とⅡ期の二段階に分ける編年を組み立てた。Ⅰ期では精緻に構成されていた各要素が、Ⅱ期ではほとんどが退化もしくは省略されてしまう状況が読み取れたと思う。また編年の過程で、従来斜縁神獣鏡の新古を見極める基準になるとされていた要素の中には、時期差ではなく製作者集団の差を示すに過ぎない要素があることも示した。具体的には、複線波紋の形状、縁部断面の形状などがそれにあたる。さらに、従来不明であった画像鏡から斜縁神獣鏡への過渡期の鏡

について、その流れがどのようなものであったか考察した。そして、斜縁神獣鏡編年を三角縁神獣鏡編年、倭製鏡編年とつき合わせその妥当性を検証し、さらに出土遺跡・古墳の時期からもその有効性を確認した。このようにして、問題の所在のところで述べた斜縁神獣鏡編年の確立については、ある程度その目的を果たし得たものと思う。

しかしながら、今回は斜縁神獣鏡の変遷と系譜に絞って考察したため、斜縁神獣鏡の性格、意義、流通、製作地、製作時期、さらに現在指摘されている製作時期と出土遺跡の時期との齟齬など、いまだ残された問題は数多い。また、今回考察した系譜の問題についても、まだまだ発展させうるものと思う。古瀬清秀があげた盤龍鏡との関連は考察すべき問題である。また、二神四獣鏡が二神二獣鏡よりむしろ古い可能性が出てきたことや、浮彫式獣帯鏡に近い表現⑥をもつ鏡の存在、銘文における「上方作」銘の存在などから、特に「上方作」系浮彫式獣帯鏡との関連についても考察する必要がある。さらに、斜縁神獣鏡と密接な関連があると考えられている斜縁四獣鏡についても、考察出来ていない。これらに関しては、近い将来、別稿にて詳述したいと思う。斜縁神獣鏡に、そしてそのほかの鏡に、その「時代をうつし」ていく作業は、果てしない。

本論は、2008 年 1 月に広島大学に提出した卒業論文の成果の一部、および 2008 年 6 月 14 日の第 105 回京都弥生文化談話会における発表内容をさらに発展させたものである。本論の作成に当たっては、広島大学考古学研究室の古瀬清秀教授、竹広文明准教授、野島永准教授のご指導を得た。大麻ゆかり氏、加藤徹氏、脇山佳奈氏、石貫弘泰氏をはじめとした、考古学研究室の構成員諸氏には終始暖かい励ましや多くの助言をいただいた。京都弥生文化談話会での発表に際しては、福島孝行氏、酒井将史氏、中久保辰夫氏より有益な助言を賜った。記して感謝いたします。

資料調査などにおいては下記の諸氏・諸機関に特にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

新井　悟、梅木謙一、金澤雄太、木場幸弘、澤田秀実、清水康二、下大迫幹洋、下垣仁志、鈴木康之、田井中洋介、平良泰久、谷口早季、田村三千夫、千賀　久、手島智幸、寺前直人、早川　圭、福永伸哉、藤野次史、古瀬裕子、槙林啓介、水口あをい、南健太郎、三船温尚、三村修次、三宅正浩、森下章司、山下隆次、山菅敦史（五十音順）。

大阪大学考古学研究室、大阪府教育委員会、香芝市教育委員会、京都府立山城郷土資料館、財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室、滋賀県立安土城考古博物館、太子町立歴史資料館、高槻市立埋蔵文化財調査センター、高取町教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、二上山博物館、広島県立歴史博物館、松山市考古館（五十音順）。

なお本論は、「公益信託　松尾金藏記念奨学基金」の奨学金による、2008 年度研究成果の一部である。

註

(1) 画ゾウ鏡の「ゾウ」という字は、「像」（三宅 1897、福永 2005 など）と「象」（富岡 1920、上野 2001 など）の二種類が用いられている。「画ゾウ」は「絵に描いたすがた」の意とされ、字義では「像」も「象」も「絵すがた」の意があるようだが、用例をみる限り「象」をその意で用いる時は通常「ショウ」と読み、「ゾウ」と読めば哺乳類のゾウの意になるようである。このことから筆者は「画像鏡」の用語を用いることにする（漢字の字義などは、鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、1992 年による）。

(2) この梅原による「平縁式神獣鏡」という用語の使われ方に関して、これを梅原が画紋帯神獣鏡や半円方形帯神獣鏡のような平縁鏡と同様のものとして認識していたとみる向きもある（村松 2004）。しかし、梅原はそれらの鏡を「平縁式鏡」とは呼んでおらず、梅原の平縁の認識自体が現在のものとは異なっていたものとみなすべきだろう。むしろ梅原が当時既に斜縁神獣鏡を名称は異なるものの独立した鏡式として認めていたことを評価すべきである。

(3) ただし、梅原末治によれば、斜縁神獣鏡は「もと時代の下る鏡式とせられ」たが、「後漢後半の一鏡式で」あることが確かめられた、という（梅原 1962）。しかしこれを裏付ける他の文献については管見に及んでいない。

(4) 岡村はその論考の中で一貫して、貞梧洞８号墓から斜縁神獣鏡が出土したとする（岡村 1993a、1999）。しかしこれは、岡村 1993a に載る表に貞梧洞８号墓が重出していること、そしてその表における斜縁神獣鏡を出土した「貞梧洞８号墓」の内容からして、後述する貞梧洞 12 号墓のことであると思われる。

(5) 崇田大学校附設韓国基督教博物館 1979 に載せられた写真から筆者が釈読した。

(6) 梅原末治『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊、鳥取県、1924 年。

(7) この表にあげたもののほか、兵庫県池田山古墳出土の鏡は、梅原末治の報告から斜縁神獣鏡と考えられるが（梅原 1925a）、実物は現在行方不明で報文以外に写真や拓本などの資料も管見に及ばず、ここでは取り扱わない。また大阪府石切劔箭神社は、表にあげたもの以外にもう１面の二神二獣鏡を有し（吉村 1989）、これも斜縁神獣鏡の可能性があるが、写真資料も含め未見である。ヌク谷北塚古墳鏡の銘文はこれまでと異なる釈文だが、これは筆者の実物観察による。なお、奈良県別所城山２号墳出土鏡は未報告資料である。この鏡に関してはインターネットにおいて情報を得、香芝市二上山博物館にて資料を実見・確認した。未報告資料にもかかわらず実物観察及び本論への掲載を許可くださった香芝市教育委員会および保管者の山下隆次氏に深謝申し上げる。

(8) すなわち、いわゆる踏返しが行われた際に鈕孔方向を変更するなどしていた場合、本要素は分類基準としての意義が薄くなる。

(9) 古瀬清秀によれば、断面が鋭く立ち上がる三角縁に近い縁部形態は画像鏡に、断面がそれほど立ち上がらない平縁に近い縁部形態は盤龍鏡に多く見られるという。斜縁神獣鏡の成立に、これらの鏡式が関わっていることが想定できる。本論では詳しく触れることが出来なかったが、このように縁部断面形態は斜縁神獣鏡の系譜の問題に深く関わっていることが予想され、これから深化させていかねばならない問題である。

(10) 古墳時代以前の日本（倭）でつくられた鏡は、従来「仿製鏡」と呼ぶのが慣例であった。しかし近年「仿」の字が常用外である等の理由で呼び方を変える動きが出ている。その候補には、「倣製鏡」（小林三 1971 など）、「倭鏡」（田中 1977 など）、そして「倭製鏡」（荻野 1982、岸本 1996 など）があがっている。まず、「倣製鏡」は、「仿製鏡」と同様の意味を常用漢字であらわしたもので、「中国鏡を模倣した鏡」といったような意味を持つ。しかしながら、倭で作られた鏡の中には中国鏡の模倣を超え、独自の紋様を創出し用いるものも少なくないため、この呼称はあまりふさわしいものではない（田中 1979）。だが「倭鏡」であると後代の「和鏡」と発音において区別がつかないし、中国製の鏡を「中国製○○鏡」と呼ぶのに対し倭で作られた鏡は「○○倭鏡」と呼ぶのでは呼称の統一が図れない（下垣

2003a)。このことから、筆者は「倭製鏡」の用語を用いることにする。

(11) 三角縁神獣鏡に関しては、従来中国製とされてきた鏡と「仿製」であるとされてきた鏡とがある。ここでは詳述は避けるが、筆者はいわゆる「仿製」三角縁神獣鏡が倭製であることに疑問を持っている。しかしながら三角縁神獣鏡がいわゆる中国製三角縁神獣鏡と「仿製」三角縁神獣鏡とに分類されているのは確かであり、その違いには何らかの意味があるはずである。そこでこれら「仿製」であるとされてきた鏡には、ひとまず「倣製」の語を冠しておくことにする。この点に関しては車崎正彦の論考があるが（車崎 1999a、1999b など)、私見についてはいずれ別稿で論じたい。

(12) 例えば、長野県兼清塚古墳出土鏡は外区が無紋となっているが、これは踏返しをした時に外区の紋様を消した可能性があるのではないかと考えている。本鏡が唯一古墳時代中期でも後葉の古墳から出土していることも、本鏡が踏返し鏡である可能性を示すものと思う。

(13) この点に関しては、石貫弘泰の教示を得た。

(14) 天河別神社古墳群の編年的位置づけが近年再考を促されていることについては、古瀬清秀の教示を得た。

(15) 先述のとおり長野県兼清塚古墳出土鏡は外区が無紋となっており、さらに鈕座も確認できない。この鏡は先に述べたとおり、いわゆる踏返し鏡の可能性があり、古墳の時期も一面だけ不自然にかけ離れているため、ここでは検討の対象から除外した。

図表出典

第１図・第２図：各報告の写真よりトレース

第３図：筆者作成

第４図・第５図：各報告の写真よりトレース

第６図：筆者撮影・作成（鏡は京都府立山城郷土資料館蔵）

第７図：筆者作成

第１表～第７表：筆者作成

引用・参考文献

石貫弘泰　2007 「古墳時代前期における無茎銅鏃の型式学的検討」『中国四国歴史学地理学協会 2007 年度大会』発表資料。

今井　堯　1993 「吉備における鏡配布体系」『吉備の考古学的研究』下、山陽新聞社、23～45 頁。

岩本　崇　2003 「風巻神山４号墳出土鏡をめぐる諸問題」『風巻神山古墳群』福井県清水町教育委員会、91～102 頁。

上野祥史　2000 「神獣鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第 83 巻第４号、30～70 頁。

上野祥史　2001 「画象鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第 86 巻第２号、１～39 頁。

上野祥史　2005 「後漢の鏡とその後」『鏡の中の宇宙』山口県立萩美術館・浦上記念館、128～134 頁。

上野祥史　2006 「画象鏡の模倣について　－図像分析の立場から－」『原始絵画の研究』論考編、六一書房、349～362 頁。

梅原末治　1921 『佐味田及新山古墳研究』岩波書店。

梅原末治　1922 「摂津武庫郡に於ける二・三の古式墳墓 」『考古学雑誌』第 12 巻第 12 号、９～20 頁。

梅原末治　1925a 「川邊郡塚口池田山古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第二輯、兵庫県、68～75 頁。

梅原末治　1925b 『鑑鏡の研究』大岡山書店。

梅原末治　1962 「日本出土の中国の古鏡（一）　－特に漢中期より後半代の古鏡－」『考古学雑誌』第 47 巻第４号、１～19 頁。

大賀克彦　2002 「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会、１～20 頁。

大谷宏治　2005　「無茎式銅鏃の特質」『研究紀要』第 11 号、静岡県埋蔵文化財調査研究所、37～44 頁。
岡村秀典　1989　「三角縁神獣鏡と伝世鏡」『古代を考える　古墳』吉川弘文館、142～170 頁。
岡村秀典　1990　「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』木耳社、３～26 頁。
岡村秀典　1992　「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』出雲考古学研究会、98～115 頁。
岡村秀典　1993a　「楽浪漢墓出土の鏡」『弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館、58～62 頁。
岡村秀典　1993b　「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集、39～82 頁。
岡村秀典　1995　「楽浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』No. 392、15～20 頁。
岡村秀典　1999　『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館。
岡村秀典　2001　「古墳の出現と神獣鏡」『東アジアの古代文化』107 号、42～59 頁。
岡村秀典　2005　「三角縁神獣鏡の成立　－徐州鏡との関係を中心に－」『鏡の中の宇宙』山口県立萩美術館・浦上記念館、135～137 頁。
荻野繁春　1982　「倭製神像鏡について」『福井工業高等専門学校研究紀要』人文・社会科学、第 16 号、61 ～ 90 頁。
笠野　毅　1980　「中国古鏡の内包する規範　－「某作（明）鏡自有紀（道・方・常・意・眞または經述）」・「紊言之紀從鏡始（または如）」－」『日本民族文化とその周辺』考古編、新日本教育図書、593～630 頁。
笠野　毅　1985　「金文の釈読」『考古学調査研究ハンドブックス』第３巻、雄山閣、106～119 頁。
笠野　毅　1993　「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第 13 巻、雄山閣、172～187 頁。
川西宏幸　1989　「古墳時代前史考－原畿内政権の提唱－」『古文化談叢』第 21 集、１～36 頁。
岸本直文　1989　「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第 72 巻第５号、１～43 頁。
岸本直文　1996　「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究』考察編、八日市市教育委員会、83～106 頁。
車崎正彦　1999a　「副葬品の組み合わせ」『前方後円墳の出現』季刊考古学・別冊８、雄山閣、53～74 頁。
車崎正彦　1999b　「卑弥呼の鏡を求めて」『邪馬台国を知る事典』東京堂出版、366～408 頁。
車崎正彦編　2002　『考古資料大観』第５巻、小学館。
国立歴史民俗博物館編　1994　「日本出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集、１～858 頁。
後藤守一　1926　『漢式鏡』日本考古学大系第一巻、雄山閣。
小林三郎　1971　「鼉龍鏡とその性格」『駿台史学』第 28 号、13～30 頁。
小林行雄　1961　『古墳時代の研究』青木書店。
小山田宏一　1994　「３世紀の鏡　－漢鏡７期の流入の始まりと三角縁神獣鏡の関係－」『倭人と鏡』その２、埋蔵文化財研究会、７～20 頁。
下垣仁志　2003a　「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第 49 集、19～50 頁。
下垣仁志　2003b　「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第 50 集（上）、７～35 頁。
下垣仁志　2004　「玉手山古墳群の鏡」『玉手山古墳群の研究』Ⅳ、柏原市教育委員会、64～90 頁。
高久健二　1993　「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』第 78 巻第４号、33～77 頁。
高久健二　1995　「楽浪墳墓の埋葬主体部　－楽浪社会構造の解明－」『古文化談叢』第 35 集、95～159 頁。
高田健一　1997　「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』第 31 号、１～23 頁。
立木　修　1994　「後漢の鏡と３世紀の鏡　－楽浪出土鏡の評価と踏返し鏡－」『日本と世界の考古学』雄山閣、311～341 頁。
田中　琢　1977　『鐸　剣　鏡』日本原始美術大系４、講談社。
田中　琢　1979　『古鏡』日本の原始美術８、講談社。
田中　琢　1981　『古鏡』日本の美術 178、至文堂。
辻田淳一郎　2001　「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』第 46 集、53～91 頁。
富岡謙蔵　1920　『古鏡の研究』丸善。

新納　泉　1991 「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山 51 号墳』、『権現山 51 号墳』刊行会、176～185 頁。
西川寿勝　1994 「わが国にもたらされた舶載鏡」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要』２、１～16 頁。
西川寿勝　1999 「三角縁神獣鏡と卑弥呼の鏡」『日本考古学』第８号、87～99 頁。
西川寿勝　2000 『三角縁神獣鏡と卑弥呼の鏡』学生社。
西田守夫　1968 「神獣鏡の図像　－白牙挙楽の銘文を中心として－」『MUSEUM』第 207 号、12～24 頁。
橋本達也　2000 「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会、古代学協会四国支部、17～42 頁。
林巳奈夫　1989a 「中國古代の遺物に表はされた「氣」の圖像的表現」『東方學報』第 61 冊、１～93 頁。
林巳奈夫　1989b 『漢代の神神』臨川書店。
林巳奈夫　1993 『龍の話　図像から解く謎』中央公論社。
樋口隆康　1953 「中国古鏡銘文の類別的研究」『東方学』第７輯、１～14 頁。
樋口隆康　1979 『古鏡』新潮社。
福永伸哉　1991 「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第 38 巻第１号、35～58 頁。
福永伸哉　1994 「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第 41 巻第１号、47～72 頁。
福永伸哉　2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会。
古瀬清秀　1982 「広島県出土の中国鏡について（上)」『広島大学文学部紀要』第 42 巻、141～160 頁。
古瀬清秀　1999 「広島県前期古墳出土の特徴ある青銅鏡について」『考古学から見た地域文化』溪水社、59～78 頁。
水野敏典　1997 「捩文鏡の編年と製作動向」『日上天王山古墳』津山市教育委員会、94～111 頁。
三宅米吉　1897 「古鏡」『考古学会雑誌』第５号、216～223 頁。
村松洋介　2004 「斜縁神獣鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号、43～60 頁。
森田克行　1998 「青龍三年鏡とその伴侶　－安満宮山古墳出土鏡をめぐって－」『古代』第 105 号、101～113 頁。
森田克行　2006 『今城塚と三島古墳群』同成社。
森下章司　1998 「鏡の伝世」『史林』第 81 巻第４号、１～34 頁。
森下章司　2007a 「楽浪墳墓群の立地と出土鏡」『渡来遺物から見た古代日韓交流の考古学的研究』立命館大学文学部、59～74 頁。
森下章司　2007b 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第 54 巻第２号、34～49 頁。
山田俊輔　2006 「上方作系浮彫式獣帯鏡の基礎的研究」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第７号、15～26 頁。

遺跡・古墳文献

山梨県小平沢古墳

山本寿々雄　1962 「山梨県東八代郡中道町小平沢古墳出土の二神二獣鏡について」『富士国立公園博物館研究報告』第７号、27～28 頁。
小林広和・里村晃一　1978 「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」『信濃』第 30 巻第２号、56～67 頁。
山本寿々雄　1980 「小平沢古墳(前方後方)と近在の方形周溝墓を考える上に」『甲斐考古』17 の１、412～416 頁。

長野県兼清塚古墳

大沢和夫　1983 「兼清塚古墳」『長野県史』考古資料編３、長野県史刊行会、1131～1133 頁。
岩崎卓也　1988 「青銅鏡」『長野県史』考古資料編４、長野県史刊行会、529～535 頁。

静岡県庚申塚古墳

静岡県教育委員会編　2001 『静岡県の前方後円墳』静岡県教育委員会。

福井県龍ヶ岡古墳

斎藤　優　1960 「龍ヶ岡古墳」『足羽山の古墳』福井県郷土誌懇談会、28～40 頁。

三重県八重田１号墳

下村登良男　1981 『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会。

滋賀県大塚越古墳

滋賀県史跡名勝天然紀念物調査会　1936 「安養寺古墳」『滋賀県史跡名勝天然紀念物概要』滋賀県史跡名勝天然紀念物調査会、75～76 頁。

小野山節ほか編　1968 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部、京都大学文学部。

〃　山ノ上古墳

西田　弘　1961 「山ノ上古墳」『滋賀県史跡調査報告』第 12 冊、滋賀県教育委員会、70～71 頁。

京都府稲荷山三ノ峯古墳

大場磐雄・佐野大和　1954 「山城国稲荷山を中心とする考古学的調査」『神道史学』５号(守屋光春編 1966『稲荷山経塚』伏見稲荷大社社務所、64～90 頁に再録)。

〃　長岡近郊古墳

梅原末治　1955 「乙訓郡西南部発見の古墳遺物」『京都府文化財調査報告』第 21 冊、京都府教育委員会、74～80 頁。

〃　金比羅山古墳

吉本堯俊　1965 「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1965、京都府教育委員会、51～57 頁。

大阪府弁天山Ｃ１号墳

原口正三・西谷　正　1967 「弁天山Ｃ１号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第 17 輯、大阪府教育委員会、47～130 頁。

〃　安満宮山古墳

鐘ヶ江一朗編　2000 『安満宮山古墳』高槻市教育委員会。

〃　石切周辺古墳（伝）

吉村博恵　1989 「海獣葡萄鏡の一例（上）」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. ４、No. ２、８～12 頁。

車崎正彦編　2002 『考古資料大観』第５巻、小学館。

〃　国分ヌク谷北塚古墳

北野耕平　1964 「国分ヌク谷北塚古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室、22～50 頁。

〃　津堂城山古墳

坪井正五郎　1912a 「河内小山村城山古墳の調査」『人類学雑誌』第 28 巻第７号、373～379 頁。

坪井正五郎　1912b 「河内小山村城山古墳の調査（二）」『人類学雑誌』第 28 巻第９号、512～521 頁。

梅原末治　1920 「河内国小山城山古墳調査報告」『人類学雑誌』第 35 巻第８・９・10 号、203～227 頁。

梅原末治　1921 「河内国小山城山古墳調査報告補正」『人類学雑誌』第 36 巻第４・５・６・７号、80～92 頁。

鈴木裕明編　2002 『政権交替　－古墳時代前期後半のヤマト－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。

宮内庁書陵部陵墓課編　2005 『古鏡集成』学生社。

〃　黄金塚古墳

末永雅雄・島田　暁・森　浩一　1954 『和泉黄金塚古墳』綜藝舎。

〃　馬子塚古墳

森　浩一　1960 「大阪府岸和田市摩湯町出土の古墳遺物」『古代学研究』第 26 号、18～19 頁。

上林史郎・西川寿勝　1998 「馬子塚古墳出土の遺物」『摩湯山古墳』大阪府教育委員会、21～33 頁。

兵庫県ヘボソ塚古墳

梅原末治　1922 「摂津武庫郡に於ける二・三の古式墳墓」『考古学雑誌』第 12 巻第 12 号、９～20 頁。

〃　松田山古墳

松本正信　1989 「松田山古墳」『太子町史』第３巻、太子町、165～169 頁。

奈良県タニグチ１号墳

西藤清秀　1996 「タニグチ１号墳の調査」『タニグチ古墳群』高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、６～31 頁。

〃　古市方形墳

伊達宗泰　1968 「古市方形墳」『奈良市史』考古編、奈良市、309～356 頁。

〃　斑鳩大塚古墳

北野耕平　1958 「斑鳩大塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第 10 輯、奈良県教育委員会、43～54 頁。

〃　桜井茶臼山古墳

上田宏範・中村春寿　1961 『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会。

千賀　久編　2005 『巨大埴輪とイワレの王墓』奈良県立橿原考古学研究所。

〃　新沢 213 号墳

山田良三　1981 「213 号墳」『新沢千塚古墳群』奈良県教育委員会、476～481 頁。

〃　佐味田宝塚古墳

梅原末治　1921 『佐味田及新山古墳研究』岩波書店。

〃　別所城山２号墳

白石太一郎　1974 「城山第２号墳（第 21 地点）」『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県教育委員会、75～84 頁（鏡は未報告資料）。

島根県造山３号墳

山本　清　1967 『造山３号墳調査報告』島根県教育委員会。

岡山県井原市木之子町所在古墳

樋口隆康　1979 『古鏡図録』新潮社。

〃　七つ坑７号墳

安川　満　2000 「七つ坑古墳群」『吉備の古墳』上、吉備人出版、70～72 頁。

車崎正彦編　2002 『考古資料大観』第５巻、小学館。

広島県石鎚山第１号墳

高倉浩一編　1981 『石鎚山古墳群』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター。

山口県長光寺山古墳

桑原邦彦・岩崎仁志　1984 「長光寺山古墳測量調査と若干の遺物」『月刊考古学ジャーナル』No. 233、25～27 頁。

香川県岩崎山４号墳

古瀬清秀編　2002 『岩崎山第４号古墳発掘調査報告書』津田町教育委員会。

徳島県天河別神社４号墳

秋山　泰　1976 「天河別神社古墳群」『鳴門市史』上、鳴門市、212～218 頁。

菅原康夫編　1980 『天河別神社古墳群調査概報』徳島県教育委員会。

橋本達也　2001 「徳島における三角縁神獣鏡の新例と中国鏡」『徳島県立博物館研究報告』第 11 号、133～167 頁。

森　清治　2006 『鳴門市内遺跡調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』１、鳴門市教育委員会。

〃　天河別神社５号墳

秋山　泰　1976 「天河別神社古墳群」『鳴門市史』上、鳴門市、212～218 頁。

橋本達也　2001 「徳島における三角縁神獣鏡の新例と中国鏡」『徳島県立博物館研究報告』第 11 号、133～167 頁。

森　清治　2006 『鳴門市内遺跡調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』１、鳴門市教育委員会。

愛媛県朝日谷２号墳

梅木謙一編　1998 『朝日谷２号墳』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。

〃　大相院遺跡
三好裕之ほか編　2004 『善応寺畦池遺跡・大相院遺跡・別府遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター。
福岡県五島山古墳
亀井明徳　1970 「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」『九州考古学』第 38 号、10～17 頁。
佐賀県神埼郡（伝）
後藤守一　1942 『古鏡聚英』上編、東京堂出版。
大分県免ヶ平古墳
小田富士雄･真野和夫　1986 『免ヶ平古墳発掘報告書』研究紀要３､大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館。
甲斐忠彦・真野和夫・小柳和宏　1991 『免ヶ平古墳』史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館。
出土地不明（京都国立博物館蔵）
矢野健一編　1998 『古鏡の世界』辰馬考古資料館。
出土地不明（五島美術館蔵）
樋口隆康　1979 『古鏡』新潮社。
中国　山東省章丘市徴収
章丘市博物館　2002 「章丘市博物馆收藏的部分古代铜镜」『文物』2002 年 12 期、90～92 頁。
〃　河南省洛陽（伝）
梁　上椿　1940 ～ 1942 『巌窟蔵鏡』（田中琢・岡村秀典訳 1989 同朋舎）。
〃　浙江省（伝）
梁　上椿　1940 ～ 1942 『巌窟蔵鏡』（田中琢・岡村秀典訳 1989 同朋舎）。
北朝鮮貞梧洞 12 号墓
社会科学院考古学研究所　1983 『고고학자료집（考古学資料集）』第６集、科学・百科事典出版社。
〃　大同江面梧野里
関野　貞ほか　1925 『楽浪郡時代ノ遺跡』図版下冊、朝鮮総督府。
関野　貞ほか　1927 『楽浪郡時代の遺跡』本文、朝鮮総督府。
〃　大同江面石巌里①
関野　貞ほか　1925 『楽浪郡時代ノ遺跡』図版下冊、朝鮮総督府。
関野　貞ほか　1927 『楽浪郡時代の遺跡』本文、朝鮮総督府。
〃　大同江面石巌里②
梅原末治　1925 『鑑鏡の研究』大岡山書店。
原田淑人・田澤金吾　1930 『楽浪』刀江書院。
〃　楽浪（伝）
崇田大学校附設韓国基督教博物館　1979 『숭전대학교부설한국기독교박물관』崇田大学校附設韓国基督教博物館。
千葉県高部 30 号墳
西原崇浩編　2002 『高部古墳群』Ⅰ、木更津市教育委員会。
兵庫県西求女塚古墳
安田滋編　2004 『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会。
奈良県大和天神山古墳
小島俊次編　1963 『大和天神山古墳』古代学研究会。
島根県寺床１号墳
松本岩雄編　1983 『寺床遺跡調査概報』東出雲町教育委員会。